



# 新館長就任のご挨拶

図書館長・豊橋図書館長の  
あいさつ

## わたしと本とブックレビュー



図書館長・豊橋図書館長  
荒川 清秀

わたしが愛大に就職して一番うれしかったのは、本が好きだけ買えるようになったことである。もともと、家は家人との共同空間だから、あまりたくさんは置けない。自然、本は研究室にたまっていく。研究室はこれまで2度引っ越しし、引っ越しするたびに大量の本を処分した。5号館から研究館に引っ越したときは、本棚30本分はあった本を20本分にまで減らした。それでも本は日々増え続ける。

本が増え続ける原因は、専門書はもちろん、それ以外の分野の本を大量に買い込むからである。それはある時期に、紀田順一郎、谷沢永一、鹿島茂、丸谷オーといった読書人たちの「本の本」に出会い、読む本の範囲が広がったからである。新聞は毎日と中日の2紙を購読しているから、日曜の書評欄はいつも楽しみだ。他に「週刊読書人」という書評紙も取っているから、読みたい本はどんどん増える。本はアマゾンでも買うが、なるべく現物を見てから買いたいため、毎週1度は街の精文館へ出かける。ここの本揃えは名古屋の大書店に引けをとらない。

図書館の新刊書コーナーも、新刊書に触れる貴重な場だ。「あ、こんな本が出て」と手に取ることも少なくない。収書スタッフに感謝だ。しかし、ここでの本は開架図

書を含め、長く手元においておきたいときは自分で買う。開架図書は基本的に学生のための本である。教員が専有してはいけぬ。

こうした専門外の本はだいたい毎日夜寝る前に布団の中で読むのだが、いかんせん、わたしは寝つきがいいので数頁読むとすぐ眠くなる。それでもがんばって月に何冊かは読了する。面白い本が新たに見つければ、前の本は横において、その新しい本を読み出すこともある。時には何冊か平行して読むこともある。

10年ほど前にブックログというコーナーをホームページ上につくってもらい、読んだ本はなるべくここに書評を書くようにしている。すでに350冊を越えた。人にもよるのだろうが、わたし自身について言えば、本というものは読む尻から忘れていく。だから、最初は個人的な備忘録代わりに始めたのだが、そのうち、著者から書評の礼状メールが来たりするようになった。亡くなった著者の家族から心温まる礼状をいただいたこともある。だから、書くときもおそろかには書けない。時間がかかる。しかし、書くことでその本に対する理解も深まる。

名古屋図書館長の  
あいさつ

## 求められる図書館とは—自身の経験から—



名古屋図書館長  
栗原 裕

思い返せば、図書館および館内職員の方々には随分お世話になり、多くのことを学び、恵まれた環境を享受させていただいた。大学教員になってすぐ、研究員として活動したメディア教育開発センター(放送大学)。現在でもお世話になっている国立情報学研究所、科学技術振興機構、そして他大学も然りである。図書館の有用性、可能性については、10年程度前から、ICTの一段の進歩を発端として再認識するようになる。

高等教育関係の学会、フォーラム、図書館関係のイベントにはできるだけ参加してきた。発起人となった「大学教育改革フォーラムin東海」では、本学の豊橋図書館事務課係長(当時)にご登壇いただいたこともある。その後、ICTの進歩、質向上は、国内外で電子書籍に限らず、教材や授業のアーカイブ提供などに繋がっていった。「ラーニング・コモンズ」や「アクティブ・ラーニング」が「流行」した際には、海外も含め、見学させていただいた。以前から注目していたflipped授業も、図書館を利用する方法を含め普及しつつある。むしろ、これらの見識や経験を利活用してきた。研究面では、図書・学術雑誌の利用に始まるが、国内外のいくつかの学術雑誌の編集にも携わっている。海外に向けてオープン・アクセスの雑誌も立ち上げた。最近では、日進月歩の技術・技法、取り組みに追いつくのに大変な状況である。また、学内ではじまり幹事役の一人を務める「土曜会(読書会)」では、それぞれの「知」の個性を基にした関連な議論に参加させていただいており、これは贅沢な空間である。多くの知見や

真摯な取り組みに触れるのは、まことに幸せだ。

大学図書館の役割に関して、さほど見解の相違はなかろう。教育・研究活動の効果的・効率的な展開、社会に対する教育・研究活動の発信と連携などである。経済学部のごささま移転前に、学部長として、研究活動の活性化、産学官連携の実現に加え、「主体的・能動的な学びを引き出すための、学生参加型授業、協調・協働学習、課題解決・探求型の学び、体験学習」「現実社会の課題と専門的知識との関連性を意識し、体験と知識を総合化する方法の修得」を方針として掲げたが、その考えは微塵も変化していない。これらの実現のためには、教育・研究活動の深化に加えて、図書館での専門能力を有する人的資源の活用・支援、図書館間の組織的連携、図書館を含めたコンテンツ分野でのICTのさらなる活用(言うまでもなく、電子媒体のみならず紙媒体の資料などを維持、提供することも必要である)、学内関連組織の連携が求められる。そして、「思索の場」「知的営為がなされる場」が大学、図書館にはほしい。さらに名古屋校舎では、「居場所」としての配慮が求められている。空間としての最大の利用者は学生であり、そのために最大限の配慮をするのは当然である。

幸い、スタッフの方々にも恵まれている。学生サポーターも存在する。「知を愛する」教職員、大きな可能性を秘めた学生、そして地域・社会の皆さんと、よりよいものをともに築き上げていきたい。大学が本来の機能・役割を果たすために。